

社団法人日本心理学会研究集会等助成金成果報告書

<p>代表者氏名 (ふりがな)</p>	<p>いとう まさと 伊藤正人</p>	<p>所属</p>	<p>大阪市立大学大学院 文学研究科心理学教室</p>
<p>研究集会等名称</p>	<p>第16回行動数理研究会</p>		
<p>成果概要</p>	<p>1) 参加人数 (会員・非会員及び認定心理士の人数を記載してください)</p> <p>会員 18 名 (うち認定心理士 2名) 非会員 12 名 (うち認定心理士 0名)</p> <p>2) 集会等の目的・成果等 (実施内容・成果・将来計画等を用紙範囲内に記載してください)</p> <p>本年度は、日本行動分析学会第26回年次大会の翌日(8月11日)に慶応義塾大学日吉キャンパスにおいて開催された。講演者は、人見彩子(慶応義塾大)、長谷川貴之(広島大)、中村道子(駒沢大)、平岡恭一(弘前大)、井垣竹晴(東京女学館大)の5名であった。講演テーマは「異なる反応型を用いた反応復活の分析」(人見)、「系列学習の獲得を促進する諸要因の検討」(中村)から、「計時行動についての定量的分析の基礎」(長谷川)、「選択行動の微視的分析」(平岡)、さらに「行動モメンタムと高確率要請技法」であり、講演内容は、行動の定量的分析から、理論的解析、さらに行動の新しいとらえ方とそこから派生した臨床場面への応用可能性など、多岐にわたるものであった。「反応復活の分析」では、一度消去された反応が、別の類似した場面で生じる反応の復活について、ハトのキイツつきとペダル踏みという異なる反応型を用い、反応復活を規定するいくつかの要因について分析がなされた。「系列学習」では、大学生を被験者として、色を刺激の系列間で同じ位置を占める刺激が順序クラスを形成するか否かが検討された。「計時行動の定量分析」では、計時行動を説明する決定論的モデルをラットの計時行動のデータに適用し、モデルの当てはまりの良さを評価した。「選択行動の微視的分析」では、選択行動を説明するモデルとしての微視的モデルである瞬時最大化モデルを取り上げ、ハトを被験体とした離散型並立スケジュールを用いて、このモデルからの予測の当否が検討された。最後の「行動モメンタム」では、行動の勢いを表す行動モメンタムという考え方から派生して、臨床場面におけるあまり生じにくい望ましい反応を生じさせる高確率要請技法についての研究の現状と問題点が紹介された。</p> <p>以上の講演の後には、研究内容をさらに掘り下げる活発な議論が行われ、講演者のもとより、参加者にとっても有意義な研究集会であった。なお参加者は30名ほどあり、盛況であった。</p>		